

六 花 1



俳句雑誌りっか
2017 (平成29年)
cover design Yuna Mizuno

山田六甲

せ
妹

い
弟

かん
間

い 石伐場金の襖に初日の出
ろ 炬をはさみ年酒をかはすことが夢
は 始まりはこの岩戸より注連飾
に 鳩一羽日の出の波に遊びけり
ほ 干柿に歯が立たぬなりお元日
へ 平莊湖初風の山映しけり
と 寅さんの一句そへけり初日記
ち ちはやぶる神出の山の淑気かな
り 龍蒔絵万年筆を使ひ初め
ぬ ぬくぬくの赤子背中に初詣
る 留守電に声大きすぎ寝正月
を をかしさはまともな目鼻福笑ひ
わ わさわさと裏白採りの背負子かな
か 柏手の赤く透けたる初日の出
よ 佳きことをしてをり夢の初めかな
た たらちねの母の羽子板飾かな

れ 蓮根の穴の桃いる屠蘇祝
そ そばに置くメモ帳の読み初めかな
つ 鶴の子の菓子博多より初点前
ね 眠るひまもあらざる正月三が日
な 名の下に実印のある賀状かな
ら 落日の印南平野や初茜
む 娘らと羊日の鍋祝ひけり
う うれしいと言はるはうれしお年玉
ぬ 井を覗きこめば若水鏡かな
の 海苔の色あぶれば青に女正月
お 臆病な猫へ賀客のこんにちは
く 来島や渦の速さに去年今年
や 休むのは元日だけと誤嚥かな
ま 前崎の鱧子に屠蘇を祝ひけり
け 継続は正月虹のほどもなし
ふ 二つ神弟妹の山の初日かな

こ 去年 今年 一句 百樂 目前に
え 恵方から 印南の池を 風渡る
あ 食器洗あちやけの母は 厨へ かるたとり
さ 逆さまに 雀下がれる 門飾
き 金言を 一枚めくり 初曆
ゆ 友禅を 畳に 咲かせ 姫はじめ
め 目薬を あたためて 差す 二日かな
み 見るものが 夢より 美し 初霞
し 死ぬまでは 長生きせよと 賀状くる
え 恵方には 橋の なかりし 山河かな
ひ ひきこもる 老人になるか 稲積んで
も 物焚ける 尻暗がりの 年の暮
せ 瀬田川に 初東風の 吹きぬたりけり
す 寸止めの 刃や 道場の 初稽古
ん 梅の花 門の飾りに 水を 差す

雪嶺抄

姉いもと

笹村 政子

もたぐれば溝蕎麦に水通ひだす
山水のおとろへ知らず芋水車
倒木の重なり合へり水の秋
朝顔の実をこぼしあふ姉いもと
今いちど踏み直したる虚栗
鳥籠の外に鳥ゐる秋暑かな
漁火の沖へうつりし無月かな
影踏んで影にふまるる後の月
そのうちに鼓動の和む添水かな
たたみゐる喪服の裾の草じらみ

水澄むや水車は水を落としては 升田ヤス子

みずすむやすいしやはみずをおとしては ますだやすこ

水澄むや水車は水を落としては

眼の端に自在鉤ある栗ご飯

みやげ屋に矮鶏の逃げくる秋時雨

靴捨てて砂丘渡りぬ秋時雨

わたつみや秋寂ぶ砂の丘の果て

「ては」は「しながら」ということで、繰り返し行われる様子。水車の落とす水も秋の深まりとともに澄んで行くのだなあと、いう感慨。「ゆく河の流れは絶えずしてしかももとの水にあらず」（「方丈記」鴨長明）のようにつぎつぎと流れて来ては水車を巡り、去ってゆく。その水も夏には濁り、秋には澄みながら季節の変化に添う。変化の許されない水車は一カ所にとどまり、飽くことなく一所懸命、水に廻るのみ。

初場所や物言ひの輪の解かれたる 田尻 勝子

はつばしよやものいいのわのとかれたる たじりかつこ

冬星座電気パルスの駆け廻る

果てしなき長き夜に舟漕ぎ出しぬ

そぞろ寒人工知能に襲はるる

秋風のメールありけり返事せず

初場所や物言ひの輪の解かれたる

初場所は両国国技館。今年一年を占う大事な初場所。相撲はもともと神聖な行事で神に捧げる行為。観客の女性は晴着で棧敷を飾る。力士は初日を白星で飾りたい。両者全力で纏れ、際どい勝負になった。行事は必ずどちらかに軍配をあげる。たちまち「まったこの物言いで、土俵上の協議。力士・観客は固唾を呑む。協議が終わり、審判長からいよいよ判定が下る緊張の一瞬。

二八年度最優秀句

小春日や伊根の男の京言葉

廣畑育子

に編集委員無記名投票で決定しました。

候補作品

山桜遠き田川に散りにけり 藤生不二男
淡路島一望にして風薫る 永田万年青
草餅や茶の間に通す妻の客 佐津のぼる
門といふ門開きあり仏生会 住田千代子
水音に生けてありたる半夏生 延川五十昭

主宰は「小春日」が動くと言いましたが、その他の編集委員から「小春日」が佳いと強い意見が出ました。再び主宰は「小春日の穂やかさと京言葉のはんなりさが即きすぎで推敲の余地あり。また、取り合わせにはよほど一句を統べる季語でないと忘れやすい欠点があるとも。

雪卿集

秋しぐれ

永田万年青

夕顔の実に送らるる千鳥足
遠くより微笑み返し秋うらら
秋しぐれ傘杖にして濡れてをり
てのひらに乗るほどの遺骨暮の秋
秋の暮気が付かば下向いてをり

秋 思

志方 章子

霧雨にけふる山並まんじゆしやげ
うひうひし咲きしばかりの曼珠沙華
コスモスと聞きしのみにて和みけり
まだ生きてゐるかと覗く虫の籠
秋思かなアールグレイの香り立ち

雪卿集

良夜

出口

誠

菜園の手入れの進む体育の日
草抜きは種目にはなし体育の日
体育の日昼近くまで眠りけり
大木のとつぺん揺らぎ天高し
良夜かな二人そろひて勉強す

秋冷

藤生不二男

秋冷の刈り残されし遠田かな
曼珠沙華とどまりおれば日暮れけり
束の間の日のあたりゐる晚稲かな
秋水に写れる影のみな全し
喪の家の灯にゆきあひし野分かな

雪樹集

砂丘

住田千代子

秋しぐれ砂丘の底に潮の噴き
屋根草に淡く紅棄のきざしあり
秋高し砂丘の点となる駱駝
迷ひ道さらに迷へる秋の暮
砂丘なる色なき風の果て知らず

ごろごろ岩

廣畑 育子

鶏頭を倒して矮鶏のくぐもれり
杉の里すだちのかすかなる香り
峡の朝高くひびきし威銃
谷間に光る踏切稲みのる
鷹渡るごろごろ岩の海風げり

雪樹集

ゐのこづち

赤松有馬守破天龍正義

卯の花に麻の実を入れて出されけり
捨て切れぬ良き香残りし秋扇
虫の音の集く中なる眠りかな
ゐのこづち付けて戻りし初デート
吾亦紅別れとなりしあの頃や

人

妻

溝渕

弘志

運動会若い人妻借り走る
突如して匂ひ包まる金木犀
七五三大人六人子は一人
秋の暮たこ焼き匂ふ女学生
鳥渡る点から線へ大宇宙

蛍雪譚

六甲選

二十八年二月号鑑賞と随想

万国旗どこに消えたか運動会 北村ちえ子

今月のちえ子作品は運動会を主として詠んだ。昔は校舎から校庭の端まで万国旗が放射状に飾られて、いかにも運動会という華やかさがあつた。が、最近の運動会に万国旗は見あたらない。軍国主義の復活反対など理由はさまざまだろうが、そういうことに気を回すことより、原発被害の生徒をいじめを停める方法を真剣に考えた方がいい。

長月や故郷ばかり気に掛かり 米沢 幸幸

米ちゃんの故郷を知らない。だが、故郷を思う、懐かしむ気持ちには知っている。「長月」というのは陰暦九月のこと。いまで言えば秋も深まりかけ晩秋の入り口あたり。物思う月であり、人恋しい月である。鹿も哀しげに鳴く。兎も穴へ入るころ。「故郷」や「里の秋」など囲炉裏が恋しい時期。おさな馴染みや山や里の光景がしきりに思い返される月。

侘助は席入りの我迎へをり 浜田久美子

席入りとは茶会の客が茶席に入ること。またその作法。侘助が床柱か床の間に生けてあるのだろう。

侘助は茶の花として相応しいとされ、侘び寂びに叶っている。清楚で、心落ち着く花は亭のもてなし。したい。

六花集



一月号 到着順

江見 巖

手の中に匂ひかくせり藤袴
吾亦紅小説にある点と線
虫喰ひの大きく目立つ栗拾ひ
角伐られきよとんと鹿の顔になり
葉なる納経帳の紅葉かな

大内 幸子

稔り田の匂纏ひて戻りけり
朝寒や始発列車の知らぬ間に
勝手口出て青柚子を挽ぎにけり
縁側も軒も干し物日本晴
衝立や掛軸替へて初炬燵

延川五十昭

芒野を赤く染めゆく夕日かな
工房の面打つ音百舌鳥の声
鱧の背と言へる岩あり秋の浜
破蓮やはちすの穴の黒さかな
白兔祀る社や浪の花

延川 笙子

倒木の太き幹より秋の水
四十雀鳴きて烏山椒の実の赤し
秋の蚊や動体視力衰へず
秋深し鶏のくしやみを聞きにけり
若冲の絵より抜け出し秋の矮鶏

善野 焔

望の月義賊の墓の文字現るる
秋燈の辺に高原の風いたる
屋台庫を閉ざると秋の空見たり
山国は霧たちながら時雨けり
秋祭り同窓の座のそこここに